

## 7. 保育士としての資質向上（研修・研究活動）

### 7-1

**あなたは、保育士としての責務と誇りを自覚して、人間性と専門性の向上に努めていますか。**

多様化する保育ニーズに対して、保育士への期待は高まっています。そのため、今後より一層保育士という専門職を担う者として、その責務の重大さと自覚をもって保育にたずさわることが求められています。

まず、保育士は子どもの豊かな成長と発達を支援する責務を負っています。そうした保育は、保育士自らの人間性に裏打ちされている面が大きいからです。したがって、保育を担うためには保育士自身が自己の人間性を高めていく努力をすることが不可欠になります。

そのひとつに、保育の主体である子どもへの思いがあげられます。保育は子どもがただ「好き」というだけで成り立つものではありません。子どもを一人の人格をもった人間として受け入れ、その子どもの豊かな育ちに寄り添い、支えていく気持ちがどうしても必要になるからです。そうした子どもへの思いを規定する要因として、その保育士自身の人間性が問われてきます。

保育士としてだけでなく、一人の人間として他者への理解と思いを深めていくためにも自らが絶えず研鑽しようと努めることが重要になります。

また、こうした豊かな人間性を基盤に、常に専門性を高めていく努力を欠かすことはできません。その方法として、例えば研修や自己点検、自主的な自己学習があげられます。保育のガイドラインである「保育所保育指針」では、以下のような内容が示されています。

「保育や子育て支援の質を常に向上させるため、保育所における職員研修や自己研鑽などについて、不断に努めることが重要である。」

また、同時に「保育所に求められる質の高い保育や入所児童の多様な保育ニーズへの対応並びに子育て支援等のサービスは、職員の日常の自己学習や保育活動での

経験及び研修を通じて深められ知識、技術並びに人間性が実践に反映されることにより確保できる」として、保育の基盤となる人間性と専門性を高めるために、研修や自己学習さらには日々の保育活動の経験の必要性が指摘されています。

このように、保育士は自らの職責を果たすために、保育の質の向上と自己を高めていくための努力を不断に行うことが求められています。

(須永)

## 7-2

**あなたは、自分の保育を振り返り、問題点や課題を見つけることができますか。**

保育士の資質を高めるためには、研修や自己学習などの方法が考えられる一方、自らの保育実践をとおしてその資質を向上させる努力が求められています。

自己点検・評価はそのひとつで、そのことばで示されているように、自己の保育実践を省みて自らを評価するもので、その結果を踏まえ自己の保育の質を高めていく方法です。

この自己点検・評価のために作成された「新チェックリスト保育士篇」では、その活用による効果について次のように記されています。

保育士自らが自己点検・評価する（見直す）ことによって、保育内容の質の向上に努めることができる。

その内容的には、1. 保育の理念、2. 保育の内容、3. 保健活動、4. 保護者・地域社会・関係機関との連携、5. 地域の子育て支援、6. 保育園の職務・役割分担、7. 保育士としての資質向上などから構成されています。

なお、この自己点検・評価は「保育士が主体的に行うものであって、そのことが、自身の保育の向上に役立つものとなる」と、あくまで保育士自身の主体的活動として行われることに真の意義のあることが明記されています。

このように、自己の保育について気づかない点や改善すべき点をそのつど内省し、

早い段階からその問題点や課題をみつけ、見直すことが自己の資質の向上につながることから、この自己点検・評価を積極的に活用することが求められます。

また、保育実践の結果について園内研修や事例研究を定期的に、また継続的に行い、他の保育士から保育を振り返る機会を得られるようにすることも自己を省みるひとつの方法です。

さらに、第三者評価の結果を生かして自己の保育における問題点や課題をみつけるようにすることも欠くことはできません。

この他、保育を利用している保護者からの指摘や要望に耳を傾け、そのなかから自己の保育を見つめ直し、どこに問題点があるのか、またこれからの課題は何かを知ることが大切です。決して自己満足に終わらないように心がける必要があります。

(須永)

## 7-5

**あなたは、その日の子ども一人ひとりの活動や姿を、しっかり記録に留めることができますか。**

日々の保育のなかで、子どもはさまざまな表情や活動をみせます。なかでも、3歳以上の子どもは行動の範囲や内容が多様になり、保育士や友達との関係も発達に応じて活発さがみられるようになります。保育士はそうした子どもの活動や様子を的確に把握し、次の保育に生かすように努めるべきです。

そのためには、子ども一人ひとりに目を向け、その日の状態を知り、保育日誌や個別の記録などにまとめるようにすることです。

その際、次の点に留意する必要があります。

まず、客観的に子どもを観察し、前後の状況および全体の経過をふまえて把握するようにし、一時的あるいは断片的な部分で判断は避けるべきです。

次に、その子どもの成長・発達の状況に配慮して記録することが重要になります。子どもの成長・発達は、連続性を特徴としていることから、その日の行動や様子を

把握し、それがその前の活動とどうつながるのか、といった意識でとらえようとする視点も記録をとる上で必要な場合があります。

記録には、子どもの成長・発達に関する事項だけでなく、健康上の留意点などを記載し、保育に生かしていくことも重要であることから、ふだんの子どもの健康状態を知るためにも、その都度、正確に記載するように努めることが望ましいと思われます。

また、保育中に起きたケガやトラブルなど、その後の保育に影響することがらについても、状況を正しく記載し、どういった対応がとられたのか、事後の経過を含め、的確な記載が求められます。

この他、記録に際しては事実にとってわかりやすい表現で記述するよう配慮する必要があります。それは必要時に活用する際、その状況が速やかに理解できるように記載されていなければならないからです。そのためにも、漢字や語彙の使い方などの基本的な文章力と豊かな表現力を身につけるように常日頃から心がけるべきです。

このように、保育士は通常の保育をとおして子ども一人ひとりについての記録をとると同時に、それを過去のものとするのではなく、これからの保育に生かしていくための重要な資料として活用することが大切です。

(須永)

## 7-6

**あなたは、どのような子どもについても、一人ひとりの課題をみつけ、ケーススタディーをすることができますか。**

保育士は「家庭や地域社会との連携を図り、保護者の協力の下に家庭養育の補完を行い、子どもが健康、安全で情緒の安定した生活ができる環境を用意し、自己を十分に発揮しながら活動できるようにすることにより、健全な心身の発達を図る」(「保育所保育指針」) 責務を担っています。その具体的な保育活動として通常の保育がありますが、同時に保育士はその保育活動をとおして一人ひとりの子どもにつ

いて取り組まなければならない課題を見出し、その解決に向けた活動を行うことが期待されています。

そのひとつに、ケーススタディーという方法があります。このケーススタディーは事例研究ともよばれ、保育の質の向上を図る上では、極めて重要な活動といえます。

また、これはある事例、例えば子どもの成長・発達に関する題材を取り上げて、さまざまな視点から検討を加え、その過程で克服すべき課題がある場合にはその具体的な解決方法を見出すといった研究方法で、共通するテーマや経験をもつ複数のメンバーによって構成される場合が一般的です。

このケーススタディーのよい点は、子ども一人ひとりの状態を振り返り、これから必要とされる保育の方法や内容を明確にすることができる点です。ひとりで行う方法もありますが、複数の構成メンバーで行う場合には、それぞれのケースにしたがって各メンバーによる相互の意見や経験に基づいて話し合いが行われるため、問題の所在をつかみやすく、解決への道筋を明らかにすることが容易とされています。特に、保育の難しい子どものケースでは、豊かな保育経験のある、あるいは高い専門性を有するメンバーがいる場合は、その効果は大きいといえます。しかし反対の場合も少なくなく、実施してもメンバーや進め方によっては、ケーススタディーの利点を十分生かしきれないこともあります。

そうした場合、専門的立場にあるスーパーヴィジョンを導入して、その効果を図っていくことを考える必要があります。

保育士が保育実践を整理して再度見直し、子ども一人ひとりの課題を明確にする取り組みを継続的に行うことは、保育士自らの資質向上を図る上で、絶対条件といえます。今後そうした取り組みを自主的に、また主体的に行うように努める必要があります。

(須永)

## 7-7

**あなたは、保育の悩みや疑問を解決するために、研究・専門書をみつけて、そこから学ぶことができますか。**

子どもを保育する実践活動では、疑問や悩みを抱えることが少なくありません。そうした場合、その解決を図っていく必要に迫られます。解決に向けた取り組みにはさまざまな方法がありますが、例えば、そのヒントを得るために関連する研究や専門書を利用する方法があります。

今日では、子どもに関する研究や専門の図書が広く出回り、一部を除くと、容易に入手することができます。したがって、保育で生じた悩みや疑問をこうした図書や教材によって解決の糸口をみつけられる状況にあります。

しかしながら、こうした手段を利用する場合、次の点に留意する必要があります。

周知のように、保育をはじめ人間科学の領域は、その進歩に伴い、これまで不明であった事項が次第に明らかになりつつありますが、いまなお意見が分かれたり、科学的に解明されていない点も少なくありません。また、保育の方法や内容について、基本的な事項はありますが、「これが正しい」とか「これが答え」といえる部分はそう多くなく、むしろ日々の保育実践をとおしてその解答を得ることのほうが多いと考えられます。したがって、解答を必要とする研究成果や専門書に振り回されないようにする必要があります。そのためには、自己の保育実践の経験から得られた知識や技術に照らし合わせて冷静に判断する能力が求められます。

また、必要に応じてその図書や研究を中心に自主的な検討会や話し合いをもつようにすると一層理解が得られる場合があります。すなわち、同じ内容のものでも、読み方や動機づけが異なっていたため、相手の感想や意見を聞くことにより、さらに深く内容を理解できたり、見落としていた箇所気づく場合もあるからです。

保育は実践活動ですが、そこで日々展開する子どもとのかかわりにおいて生じる疑問や悩みを解決するために、他の保育士に相談するケースはよくみられますが、自らが問題の解決を図ろうと、研究・専門書を調べたり、参考にする姿勢も他方で大切な保育活動といえます。

(須永)

## 7-8

**あなたは、他のクラスの保育について、疑問や感想・意見を、お互いの向上のために、言葉に配慮しながら素直に述べることができますか。**

保育士は、常に自らの保育の質を高める努力が必要であると同時に、他のクラスの保育について客観的にみられる立場にあります。

そうした立場から、自己の保育を見つめ直すことが保育士には求められます。

また、それで終わらせるのではなく、必要に応じてそのクラスについて自らの意見や感じていることを伝えることも責務といえます。

その場合、次のような点に配慮が必要となります。

まず、そのクラスの状況をよく把握して意見や感想、疑問を述べるようにすることです。クラスには、その保育士の考え方や方法、子どもたちとの関係、さらには雰囲気などがあるため、そうした点を十分理解したかたちで、自らの考えや感じていることを伝えるようにします。

次に、そのクラスの担当の保育士の性格や経験、保育についての考え方をよく理解した上で、意見や考えを話すようにすることが大切になります。理解してほしいことを伝える場合、相手の受け止め方が異なることからことばは選んで使うようにする必要があります。これは相手の保育士との間で誤解を防ぐことにつながるからです。

また、こうした場合、相手の保育を十分尊重する姿勢をもって、対応することが前提になります。その保育士の保育を一方向的に否定したり、非難するような方法で意見や感想を述べることは、こちらの意図する目的から外れて、かえって相手を不快にさせるなど、逆の結果を生むことになる恐れがあります。

なお、他のクラスの保育について自己の意見を述べる機会は、個人的に、あるいは会議や集まりなどありますが、そうした意見や感想を述べる場の状況に対する配慮も当然必要になります。

この他、そのクラスの保育士との関係もこうした場合、考慮する必要があります。経験や年齢が上の場合はより慎重に、ことばを選び、その場の状況などを判断する

ように、また、反対の場合では、自己の意見を押し付けたり、一方的にならないように、あくまで意見や考えを述べ合い、それが相互の保育の質を高めることにつながる目的で行っていることを理解してもらう配慮が不可欠になります。

他のクラスの保育について、疑問や感想・意見を述べることは、他の保育士の保育をとおして自己の保育を見つめ直すひとつの機会になるということを忘れてはならないでしょう。

(須永)

## 7-9

**あなたは研修で得た内容・成果は、園の職員にわかるように丁寧に説明し、意見交換をするために役立てていますか。**

資質の向上を図るために、保育士をはじめ保育所の職員には研修や研究活動に取り組むことが求められています。

基本的に保育所では所内の研修に加え、職員の資質を高める目的で、経験年数や職制、さらには研修の実施内容などによって外部の研修会に職員を参加させています。

研修は、その目的によって内容やレベルに違いがありますが、こんにちのように、保育全般の動きが早い状況にあっては、新たな保育界の現況の理解や必要とされる知識・技術を獲得する上で、ますます重要になっています。

また、多くの保育所では研修の参加については、該当する職員1名から数名程度の参加になっています。そのため、研修で得られた内容を研修後、所内の他の職員に伝えて、共有する必要があります。

その場合、留意すべき点があります。

まず、保育士をはじめ職員は研修の意義を改めて確認し、参加する研修の目的や内容を事前に理解しておく必要があります。保育所では、順番で職員を参加させている場合が少なくないようですが、その場合でも研修の目的についてその都度きちんと確認をして参加させるようにすべきです。



そのことにより、研修への参加に対する職員の意識を高めることにつながるからです。

また、参加中、職員はその内容を理解するように努め、必要に応じて記録やメモを行うなど、参加した目的の遂行に努めることが求められます。必要な場合には質問をするなど、わからない点のないようにし、後日保育所の他の職員に正確に伝えられるような姿勢で臨むことが求められます。

他の職員にその研修内容を伝えるためには、当日の資料はもちろん、必要がある場合には適宜、説明に必要な資料やレジュメ（要約）などを作成し、理解を図るようにすることが望ましいでしょう。

また、その際職員から内容に関して質問や新たな説明が求められた場合には、わかりやすく、丁寧に説明できるように事前によく見直し、理解しておくことも大切です。

さらに、参加した職員だけで研修の内容を占有するのではなく、保育所内の職員全員がその研修の内容を知ることができる機会と時間をつくるように努める必要があります。

（須永）

## 7-10

**あなたは、積極的に研究グループやサークルに参加して独自に勉強していますか。**

今日、保育界は少子化社会のなかであって、子育て支援のあり方や待機児童問題など山積する課題に直面しています。また、幼保一元化の議論にそって総合施設としての「認定こども園」の制度がスタートしました。

このように、近年保育の世界は急速に変わりつつありますが、同時に、子どもに目を向けると、生活リズムの変化による心身の問題や精神面での遅れなど、子どもの育ちに異変が起きているといった指摘も聞かれます。

また他方、保育ニーズの多様化で、さまざまな保育の形態およびそれに即した保育内容がさらに求められています。

こうした状況にある保育を、実際に担っている保育士は、保育の現場をとおしてこうした子どもの異変や保育の動向について、正しい情報と知識を持つことが不可欠です。

そのためには、保育所内・外で行われている研修は有意義ですが、同時に保育士自らが自主的に、また主体性をもって学習する姿勢が必要とされています。

例えば、保育団体や特定の研究グループなどが主催する研究会やサークルといった集まりに参加する機会をもつようにすることも必要になっています。この場合、勤務ではないので自らが学ぶ意識と目的を強くもつことが求められます。

また、その際、主催する側の実施目的や内容などを事前に理解して、十分納得してから、参加するようにすべきです。実施日が定期的か否かや、参加費用などについて正確に知っておくとよいでしょう。

また、そうした機会を利用して積極的に他の保育士とのかかわりを待ち、さまざまな意見や考えを聞き、自己の保育を考えるようにすることも大切になります。勤務する保育所だけでの人間関係では、ややもすると、狭い環境であるため保育についての考え方に偏りが生じることがあります。それを見つめ直す機会にもなるため、本務に支障ない範囲において、多くの関係を築くようにすることが大切です。

常に変化する今日の保育にあたって、保育士は日々の保育を見直し、自身の保育の資質を高める努力は必要であり、自らの考えや思いで研究会やサークルに参加し、目的を果たすように努めることが、今後ますます必要性を増すものと思われます。

(須永)